花乃十文

帝国図書館蔵
858
58
摘桜園早苗述
国立国会図書館　タイトル『花の十文附十論考』　請求記号 858-58
ガラス使用

帝国図書館蔵
858-58

桜樹園の主人ハ人にもてはやされし桜を愛し劇場をこのめる所より在下おもふに桜を愛ぬ人ハ無風流にして戯場を好まぬ人ハ流行に遅るゝ丸ハまなべし。されバ主人桜をもて戯場の作る事にハいくらも出さバ熊谷桜あり桜ハ生まれにて小町桜楊貴妃桜ハ且あり。提灯桜ハ新しく世の場所手毬桜ハ道成寺の手踊。江戸桜ハ河東節。京桜ハ桐ヶ谷の桐に東まづ定紋。雲珠桜の鶉ハ家桜にも見る。浅黄桜ハ外郎売の中桜ハ看棚の瞿飩瀑布桜ハ雲姫神の花が道を　桜ハ重の井お乳ガ仕るあり。大島桜。吉野桜。入相桜も亦桜。子午桜ハ偕にて狂言の書き外題あり。桜木親王。桜姫。つかみの桜。鬼ころしけしハ主の手数ハ春風の吹傳もろうべし。或ハ御殿山の波のまる。或ハ金龍山の辺にも楊弓の事をあびせ又ハ詰物るの禅の勤文に亦母るの双盤の響皆戯場の鳴物桜と

国立国会図書館　タイトル『花の十文附十論考』　請求記号 858-58
ガラス使用

やよひはしん。中の町の桜に。助六の俤あり。隅田の渡しの花
に女清玄を思ふ。仕女の行列に梅若数輩の老肉をみるごとく
辨女の花見に紫花遍言の師母をみるごとし。深山寺の花ある(に)
ハ眠む者も行ゑも達して。法華寺の桜様子ハ成相寺の
杜若も出そろふべし。花の場の花子をみてハ。女たまハ清元の
奏曲を思ひ芥太夫にして竪琴の曲屏をとらへ文花を惜む性
より染田屋を庭番にうえバ花見の庭をも風にふかる所ぞかし。
かく風流ありて流行にかれぬ花の好作の職ふ相綴の麹塵
相文の浮世を唱来んに悪禅をぶちこむ痴漢ある簡ならんや。
此書の戯門に枝の役をとりかゝる衆山人の絃声をつのひ。
戯門手巾のもとをさ述ぶ。綴る相識の絃を綴ることをさするまで
ハ河原崎班の水北に居く。壽量の俗称に縁ある七十七歳の
老朽静居散人

花の十文（とも） 附 十論考（とろんかう）

東都　橘樹園早苗述
龍遊子閑淵校

花十文十論考発端詞（はなのとも とろんかうほつたんのことば）

延暦の御時平安の都となりしよりもはやの千余年になりめでたきことハいふもさらなりされバ余の国々を鄙といひきらひてしやしきふれ悪言ふハいせこじき上州の馬ぬすくとなどたれいへどにもむかし今ハいふもあはりなく時代なれどけふれしを御洒落にて神風の伊勢ハつしもくも大坊ん祢おはしまし武将ふハ早雲寺殿も孫のひとりがたりつけハ志良登保布乎新田徳川の本国なり又花をいはふ「こゝまで来のその精ともとそぞろし」と詞花集よりえらされバさる事を題にしてうたよみて友のいひしゆゑにようとしきを又てしかまかゝるしられど「都よりみての桜はらしなの月」さて歌を萬葉古今にも名所ハ鄙に多く国々ふり戯笑歌も古このりなぐれて今俗語も

てよむをと狂歌といへども いふ〳〵も やごとなき隠人も もてあそび給ひけんさるハ「文化のころ六樹園狂哥百人一首のをしへきに狂歌の起てのことの門ハこゝろをことよりそはられたることのへの次ハ蒔六左をがよめるあつて平治物語に記したり 九條大相国なども古くもして よませおかれしより 愚管抄にもしるされ ハやごとなき隠人もまうる戯れハおもしろくありとて あひとりなさしかれど略」今江戸ハさらなり東にも専らおこなはれしより 夫よりつゞいて狂文のことハ寛文六年に板になりし古今夷曲集の序ハ生白庵の長文にて又元禄十三年（西行五百年忌）鴫立沢に碑を立られし銘を三千風が狂文にかきしハ長編にて其文のよしやあしやハおきても古き説より出しものにて又連歌より出し俳諧ハ守武を鼻祖とし（俳家奇人談）「ふるくハ芭蕉より国々に一統行れしより其後の文を風俗文選（許六）に集められしこれ今の狂文ありつゞいて本朝文鑑（九巻 支考）和漢文操（七巻 支考）明和中六部集（風来山人）鶉衣追て（十二巻 也有）四方の赤 千万の紅紫（南畝）くぐり文庫（金鶏）余ハ略すいづれも古事今様をまじへて奥を尽しけれど其中にもとく撰をめでし狂文といへバ板になさざるハなほあまたあるに文化中あつまりし出て撰ものめでの文撰の間の絶ることなくありけれども今も栄花の御代乃

江戸の花の名所の狂文を作る書どもなきに及ばざれバ近くてなきところもせら桜さく峯のさきのたくひながらきる人ありといふとて思ひ記すおもらか花さくにてくさいひくるを十論とよばれしなりぞ名ひ付たる古くハ法に六義和歌に六くさ好典に法ハ法実相の十如あり東垣が十書の論文操に八品の新制なんどあれといふへど何がならずともまてやんしてどふまのとこの時やことハなけれども風の吹とふらく花もあちこちぶらんとなれはこゞふかのまるまひ年牌たぐひのわらひ草なるべし

十論考

第一段 開る説櫻の訓の考

昔をむかれて今ハそしけるとハ言霊の幸ふ国の五万都鄙雅俗ともふうつりそしく今のいやしき戯言なりけれど按るに是よろづよやくりて昔をなるべけれど今ハ桜開るといふぞあらんそのこと十三ちゝりと開耶のひらきたらし木花開耶姫の開耶ハ桜のことにてもと開耶といひきたんを

咲簇(さきむらがる)に囀(てん)じてさくらと云にぞあらんと和訓栞にいへれど聴には王仁(わに)が歌
のこの花の證に梅としいふも後の説にしてふるく木の花とは諸木の花をさせり
六帖に即此歌をさくら木の花の題に入 餘材抄にも只花ときこえ 遠鏡にはコノ
花トヨンダハ梅ノ花ヲ云タテアラフとこたへたりされども右にも云和訓栞の
説に木ノ花の義神代紀に木花開耶姫の名ありてさくらにて云如なり 同書に
禁河の書によれば櫻のうつくしき也 古今集のこの花の證は右の歌のみならず
万葉二十「櫻花今さかりなりなにはの海おしてる宮にきこしめすなへ」これは王仁(わに)が歌をふまへてよめるにて王仁が歌
も櫻としるべきにこそ光廣卿百椿序に凡日本に花と云 櫻になんかぎれるよし
申されたるにして 昔は梅をばさのみ賞せざりしも古今序に證あり
據て謂ふるものなり 梅は山生のものにあらず 西土よりわたれる種なるべし
けなにはのうめを和尓(わに)のよめるよしいへれど後人のよめるなるべし
こそと和訓栞に見えたり ○ 又なきさくらといふ一種あることろ是定家卿
も見えずして古今に花櫻とよめるをよ花なるさくらなどのゆるよしにいへる

とて契沖の説あり此説古くより人の引く雅言集覧にも挙たり 又東牖子に
柳ハ緑花ハ紅と云對ハ山谷の儒の句にして此句ハ一休和尚の綴章なりと云
説もあれどまことは和論語に西行の云武士の道我なくて和歌にある方の
道といふまことの達人とハ云つべし花ハ紅柳ハ緑ありのまゝの春のけしきや
とありしをとれバ山谷の諺にいへる事二義なるべしとこそいへりまたこゝに
云東坡が詩に柳ハ緑花ハ紅真面目とこたへたり東坡ハ元豊二年黄州に
黜(しりぞけ)られたり本朝承暦三年にあたれりされど金剛経の證にもありなんとぞ
よりもいにしへよりいひ来りて用ひけるを花のとなへよろづにわたり
たる神中抄にひぢかさ雨のあめを万葉の久方のあめと解りけんと考へ
又吐懐編に桜田(そくの)橋を桜田(さくだ)の橋なるを或西洋或は桜坂全体江戸名所図会などと集めたる
桜言集覧に桜のなにはあづりつけつぎの事二つぜんは四つの花あれど豆腐(とうふ)の
あらかやうなるあやまりもいでくべくてぞありなん

第二段

櫻ノ字義(さくらじぎ) 櫻桃(あうたう) 扇形(らうぐわう) 海棠の説 桜の宮(さくらのみや)考

康熙字典ニ櫻音鶯 説文ニ果名櫻桃也一名含桃 禮ノ月令ニ仲夏之月以ニ含桃ヲ先ニ薦寝廟ニ 爾雅翼ニ果孰最先故云ニ先薦ト 呂覧高誘註 以ニ鸎所ニ含食ス 曰ニ含桃ト 又名ニ鸎桃ト 云なれば櫻の字義は鸎桃より起りて櫻桃とせしなり 櫻桃は日本の櫻とは異なるものなる説あれど略して○大和本艸十に櫻桃の説綱目を引て曰本邦に所在のものらは云小樹にしてよくなりとも云又山櫻桃も花實ともにこれらに似て小なり千葉花白紅あり淡紅の花あるも千葉は實なし 叢生して花よし 木となれば不堪を切まじ 春早く咲きて花さくなるなり 同巻十二櫻 文選沈休文カ早ニ發ニ定山ヲ詩ニ山櫻發欲然 注ニ果木ノ名 花朱色如ニ火欲ニ然ト也 王荊公カ詩ニ曰山櫻抱テ石ヲ映ス松枝ニ 司馬温公ノ詩ニ曰紅櫻零落杏花開ク 是支那に櫻と云は朱花なり 日本の櫻と云物は支那にこれなきよし 延宝年中長崎に来りし何清甫之こと若あらば支那の書に記し詩文に述作し賞詠すべきに此樹なきと云は実説なるべし 朝鮮にはあり 昔年朝鮮より漂来る舟の篷桁にさしきたる木に読るべき本邦の桜なり 余子に示し花を問しに朝鮮客曰二三月淡紅白花を開く愛すべしとなり 支那にては梓を以書を刻む 日本にては桜を用ふ 木堅くして良材なり

○垂絲海棠樹與ニ彼岸櫻ニ同 枝長く絲の如くにして下り咲る花なるべし 彼岸櫻より花小にして糸桜と支那より来る支那人是を垂絲海棠と云 合璧事類 海棠ノ説曰一種柔枝長蔕ナル者顔色浅紅垂テ英ヲ向フ下ニ謂フ之垂絲海棠ト 與ニ海棠ニ大ニ不レ類 蓋強テ名ヲ尓ナル 是を糸桜と 本艸時珍説海棠集解にもあり 事言要玄に沈立海棠記を引しも與レ此同シ 海棠にあらざれども似たる花なる垂絲海棠と名づく 糸桜を桜につゞかざるゆゑ 彼岸桜にあげばならべ 早苗云 綱目の櫻桃は日本の桜とは別種にて 櫻桃の実は日本の桃の実の大きさの果にて 鸎の含食するものなるべく 日本稀代より花なるもしく咲くをさくらと称しきたるなるべし を字書になりしより櫻の字をあてしならん

○櫻の宮のこと谷川士清云神代紀に木花開耶姫ありて伊勢朝熊の神社に櫻の樹を其霊とせしよし古記に見えて櫻の宮とも称せり西行の歌あり神名秘書の苔虫の神も櫻大刀自の神体形石に吐り苔虫さるとぞ思圓上人文永十年の記に小朝熊の宮の坤の方隅にそびえたる巖ありしもとに櫻木ありけるさ三尺ばかり此木往古已来うえし是櫻大刀自命の神体なりとみえ一ノ宮記に駿河の浅間も木花開耶姫なれば冨士も同じ伊勢朝明郡に布自ノ神社櫻ノ神社あり并に甲斐ノ国の金櫻ノ神社とも又此神を祭るより花木の中にも開ることをもてうるはしきは櫻に及ぶものなしよりて

六帖　櫻よりまさる花なき春なれば
みえ　あだし草木はものならなくに　和訓栞

松浦　月花に心を櫻のうつろへばさとはいと
宮の人の春のあはれに

清少納言も西でおもしろしと宋景濂ハ恐是ノ趙昌所難書と作れり

第三段　樺　浅黄ハ犬櫻論　氣味功能考

大和本艸十二　樺　本綱旧本になし本邦甲州に多し皮ハ雨中のたいまつによし右書にも皮堪為燭とあり白楽天東坡樺燭の詩あり

國史補云以樺燭擁馬謂之火城　樺皮炬火とありまたくく樺をかばざくらとよむハ非なりかばざくらハ一重櫻を云樺と櫻と大に異なり非同物

和名抄　櫻　和名佐久良　子大如柏端有赤白黒者也　倭漢三才圖會八十七　櫻音英　按和名抄櫻謂子不謂花何耶諸木花無比之者其樹高二三丈皮横理而老則紫色光澤有點文剥皮括捲器纏刀鞘謂之樺又用為癰疔藥中共以山櫻皮為良　字彙曰樺木名可貼弓則別此一種木乎和名抄にも亦如是別種然櫻皮之外可謂樺者未見之其材淡褐木理密而硬刪板印甚佳伐生木埋土中久取出用則愈不脆凡櫻樹稍長時春月縱入刀理緩皮則木易肥太其葉浅青色有鋸齒冬凋春生葉清明前後開花結子大小可大豆生青熟赤黒有仁小兒好食味甘美能解魚毒亦有不結子者是まで寺島良安の語なり或人云花ハ香氣甚微味苦無毒實甘酸冷無毒主治實下氣消食毒除心間酸水云云とぞり今花を藏して常湯にうかめて用ゆす酒毒を

漬て葉を藏して常にもちを包て賞す香佳也往昔小金井上水
堤ニ櫻樹數株縣官植之櫻實ノ水毒ヲ消ス故也とぞ予思ふに篤信大
和本艸編述中に櫻の氣味功能をながく志るさゞりしハ又松岡玄達櫻
品ニ云犬櫻ハ葉も色も常の櫻に似て小花むらがり生し穂をなして
花ハさくらに似ず一名奈天(なでん)又上溝(うわみぞ)と云南殿(なでん)ハ誤りなりとぞ別ありて此犬
櫻の實六月に熟して色黄味杏仁に似たり塩藏して酒を肴料とす
諸山中にあり夫木集類の歌あり樺(かば)さくら花桐のやうに似たるかハ
またあひらにも諸ありて黄櫻とも云ふハ葉色の淺黄櫻に混ぜ淺黄
にハあらずと又白らんぶの本と云其皮をはしてこのやうにとす雨中にも火
消ず去高此煙にて新画を薫て古画を似するに本艸にはんらんさり
舶來のきちにハ樺巻あり甲州信州より出此皮癰疽を療す樺皮散
と云妙藥と氷云花草白也此木ノ皮擒物工多く用或ハ笛などまくに
予かつて上州草津にあけに樺皮のくんざくを貰へり つぎたるものなり

このみに美にして墨付よし又甲州土産に櫻皮細工のものなど入手ものに稀なく
あり是ハ常の櫻皮なり

第四段　春秋ノ論　櫻壽考

四条大納言ハ春ハ櫻をぞ第一とす秋ハ菊を身てをすとの事なりし今昔物語
にいふ予按るに昔より春秋の争ひおほく定まりの定めありざりし
を今ありのさんハいとおかしとけれども紫の上の春を心とどめ秋好中宮の
秋を好みましいふ古今序の人丸赤人の春の詳のたとくふでたぐへ
づらん源氏或説の如き春かしひなまりと此情まなりし今まなひく
論せんふハ四季の志ぜんを取りていはんにハ春のふにに秋ハことぶく秋の下
に春をとゆるべくぞあらん　○　大和本艸に云櫻ハ百年の壽なし
ところへ刀にく皮をたてふさぐべし常さへく命もしところへさり
志りのふ予按るにきりのふのきふにてハ委しくもなぜ刀まで皮をとるとも
養ひまする事なれどこの木まろ刀まできずつけまでとも數種ありてこ化く

の性を知るによりて寿も長短さだまりあるなるべし　予小金井の桜を
再度みるにこゝに元文丁巳に植しといへども今も数株をのこせるなく
かくえ三へのうゑたりの古木とまりたりけれどもその木のいきほひ衰へ
ぬくあらうん花の壮観なし　上野中古木多し　秋色桜のみ遠眺紙料に
上野の古図を見るに今拙きなれど松老すあり浅草に従百余年なりければ予は見ざるなり又大井に
古く桜ありけるにもいともあらんとしるさ　台命にて桜は花たえなく続きあり又は光林寺
常円寺の糸桜ともに百有余年になりにしものもみつりはいまだに百年にもなりしとくは
いづれも無疆長寿の栄樹にぞありけん

第五段　朱櫻論　白櫻考

和名抄朱櫻　本草ニ云櫻桃一名ハ朱櫻和名波々加一ニ云迹波佐久良　古事記内ニ抜天香山之真男鹿之肩ヲ抜而取ニ天香山之天波々迦ヲ而令ニ占麻迦那波ヲ而　延喜臨時祭式十三
凡年中御卜料波波加木皮者仰ニ大和国有封ニ令採進之　堀川匡房
ゆすらの木にて占う事ありけるとかや
肩ぬく亀は未だひとあけて　榊巷談苑云　ゆすらの木といふハトする時亀を
やくにかく山のゆすらの木を用ふとぞ　昔より亀のトは公家に伝はりて
今にあり　思金神の香久山の鹿の肩をぬきて焼卜のふ木ゆすらの花
木を用ひゐるとぞ　ゆすらは今の大桜と云木に似て北国にて之つくも
うはみつとも云めと桜とも云実をもぞ桜がんと云とぞ　野呂元丈すされし
又私考云亀卜に五兆と云事あり其中にかめの字は人と云字をたう
くと云く　仲実云　ゆすらのはちくるる亀のトや」　ゆすらひとは朱桜桃火
をかうさて又云て桜桃ともつくり　かめにはあふて云るありれの字をたうけ
て亀の占は亀の灼すらくとも上にあり　師時　おかひるの亀のまにちらるてちらぶたるあひうりときぐがされしき
まて　これをいはしめでぐさいくりて△書しくらうちときをうくまさまうたて
白桜の考○色の白きは七まんかくにといひ繪のくすは素の後にすろん
墨子はいろをのるをかなしみ　淮南子　あるは白鷺のちまさてなき　白蓮の妙なる　佛ぞ
さびしきかろさはこゝろをおとるのこ　天の岩戸より天照大神出現ましまし
くし時あつれかれ面白あかくのしとうたのののふるに古語拾遺にしるせん

くり

第六段 桜の歌 杜撰論 桜の花ひらの考

杜氏撰二八陽經一其注尤鄙拙其實未レ詳其中多載下無二本據一事上故以曰二
杜撰一 無門関十五丁注 とあり 今 花のうへにさるたぐひを一つに今昔物語に南殿
の桜に土御門中納言敦忠卿のよみて奉りける歌に 此花のちりなんのちをおもへはとよみたまへるを
うらうのなさにありけれバ「おそくとくちるもちらぬもおなじ花のかぎりなき世の春にあひなん」とよまれ
て此返しうなんかなしうとうらまれど 今云此うた 拾遺集 源公忠
の歌なり 是杜撰の二つに 忠度の家集 うた世に伝ふ 此事おどろかれけり けうちに「さゝなみや
志賀の都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな」とありけるを人はさつまのかみ忠度と申し人なれば此
一の歌の合戦にうたれぬ 中略 中にこの千載集のうたの中には入られど 勅勘
の身のうへなりしかバよみ人しらずといれたりしとて 忠教の身にしみて
これをせんじあひし俊成さへもあはれになりけるとぞ云ふ こうぞ
千載集をとうのふりくれてこのうけとをやと世にはあやしきとらえん候し

にゝ清や志賀の都はあれにしをと云事をよく人知りたるとして入てよみて
既にあらはるゝ年の一の谷にて討れたるの歌の事をとかくいはでありけり
やさしき志の方も都びとの謠にいひはやしたるにや こゝに鵺衣 世(俗)有 小町の
名にふる遍昭のうたとせんのうたをもてはやしたるもかくのごとく
語りし時も今春の半なれバ東坡が亭に名付たる前後にも似たる
らんにや此ふるき一句にいはく「さく花や安く錦の柳町とこそえくらず
云此遍昭がよみしせバのうたと云ハづさんにて古今の素性法師の
うたにせば桜をこきまぜてと云のふるてあんなされども又ハ千歳
の一失中なりふみはるきがもあれバいまだ知らるゝにあらで ○花びら
の考ハ桜の花びらのさきの♡なくなりを入るるをばふぢのいくさきの穴
れある事よりよめる〈又ハ朋神のうちにさし出てよめる 万葉 つゞきあ事も似て
ある文郁のいろく成ときハ聊爾なるもあり ゆくぬけおちる花のさ
きのかけたるハ瘡のきざみらねど風雅くしの花とぞ云べかるらん

采淵云徐文熈随筆ニ昔周公旦魯ニ封ぜられたまひし
御子伯禽を魯にまします時教喩ノ語ニ衣成則闕衽
屋成則加錯とあり此加錯も欠たるなり此注東牖子に委
しくみえたりこゝに略

第七段　雨やどりの語　桜によりたる列女考

花曇の空に花見に行たる徒雨ふり出たりしこの折雅遊乃
はらはら雨ふりきぬ故あしくはとて走らんとしてぬれじとて桜の下
あるともものかげにかくれむとてまどへば手
かげかくさんとて桜の木のもとにたちよりて
いくぬれんはとこの木がくれとて花の雫たるをよけ給ひて来る人
のかたはらにてかくれんとて手に独みてゝこ傘持出られたるは笄の
さまに似たれども「花の雫たるの笄のかさとおぼしくよりたるを
手られしさのまゝに「孟宗の極むし抱とらへたると付侍り又これ
ないこのつゝくやでも花見車にて見送しあづまのとよろしは孝女に

て遊や花にやどりたるところにひしは笄なり遊　静のやとのならしたりに地
らましときとめてばやさんかるは貴妃や小町よりもの花ばかりをほし
きふや

第八段　唐土の名花ト詩仙、皇朝の名花ト歌仙の考

名花傾国両相歓の詩ハ、アヽのとめでよく今昔物語に延喜帝
のころ御榜花の料に御屏風を作らせ給ふに、歌よみ
どもに奉らせて皆よみて奉りたるを道風にかゝしめ給ふたるに
桜の花さきたるに女車の山路ゆくの書きしをおもしろしとて
寄よみどもかゝにもあらぬざりけるに忠見の書て奉りたるにて
あること延喜天皇是はいかにせん哉にて見ゆるなりとおぼしめぐら
して伊衡少将ゟで召て伊勢が御息所のかたに行てうかがひたる給る
はさよせてやらせたまへやと仰らる」中略　これよりの文ひくきに
うちありまゝにひたすらなればこれを略して出しければくは是なりけ
桜さきかゝりてはいかにと問ふ中に少将の御答の

春のくるゝ日の白ハ
あはでうらみぞゆくまで身ハ少将の家のためしとぞ申してうたせ
たまふ前遊の為にして奉れハこよなう御けしきよく奏せバよろしきと
作らる花の風ハ筆をとめられまゐらせけるに御前に侍りておりける浮御
なをとりあげて參り殿上の人のをとこに被物をたまひて文をも持まいり
てまゐる天皇是をひらきてごらんあるにいとうつくしくうきやく
花風のさそふにもおどろかずてこゝ也本の「ちりちらずきかまほしきにふるさとの花見てかへる人もあはなん
天皇ごらんじてめでさせたまひて殊にそのちり花風のこせりける
云 予云これハむかしの貴妃と李白これハ皇朝の歌仙と能書 牡
丹をおもふるねごとより花の當座ハげに聖代の歌仙ともの寵妃を
待かく傾国とためしハ字義まて倍さくいひなしたりけるなれバ
うくたとへハ花営柳池の駐いかにしあはれまさるべきハ秘説なら
まし千歳の今もくやしまれる事よや されど今本拾遺集にハちりちらずの歌貫之としてイニ伊勢とまたへり

第九段　後世まさる説　品類多少考

愛子より出て愛孫の愛さへ桐が谷川よりのぞく江戸桜ハ比
くらぶるも在きたりし名花を基としてしく甚ら一つの花まるところのむ
人情なれバとりわけ桜花生まし けれバ地錦抄といへるもの牡丹の
名花品類凡五百品のせたり桜ハ不数なれバあれ 但しおよそでの頃ふとも
百五十余あるよしのせたり 是数の多少によるべからず名歌ハ一首出ても天地を
動かす事と云花のかずたぐひなるべし

第十段　称号論　異名考

日本称櫻花曰花ト猶如洛陽牡丹成都海棠と羅山随筆にいへり
されバ桜をのみ花の王と称しまゐり始ハ雉櫻の
宮に神楽ありさくらありて桜人あり名所に桜川
桜山桜田桜井桜あり 或ハ謡に桜川酒に桜川餅浴衣に
ど雨で称しくり文異名に吉野草 花のあるじ他名草
かざしぐさ曙草春告草よりいろさ他美化

藻塩草なのめ花ぞ莫傳の異名歌数あまたありて其の数の
新たなるハ大井川清瀬の河鹿をよめれバ蛙の聲の名なれバ河鹿
とよびしにやまさでる物類稱呼といふ古き書ニ但馬の方言ニ
蛙のちいさきをかじかと云とあるを又井出の蛙も同じく本草綱目
ニ蝦蟇と鼃黽と別ニして蝦蟇大小數種あり鼃黽ハ生ニ水中ニ一種小
形にて善鳴者名ニ鼃子ニ亦作ニ蛙字ニとありて万葉集ニ夏より
秋のまでハ水中にすむ歌あり是所謂河鹿ニて河鹿ハ蛙の異名
なり其形をとる時ハあらる桜も異ハ名のごときとてハ別種なれど
思ひあれどみる時ハ論なしと跳桜の花になりてハ白桜
ぞ云イハサ花ごと云うとあるハ是一場の夢見草なりこのくさ
桜になりし花五百詠一名おもひでの端書ニ茶の湖畔の歌あり
されハ此酒癖の蛙の戯言を合せて花の十文をならひて對し
せんとかゝる業花の御代ニまでとめるとのかしこともおぼえて

あやしげなる花の大江戸の花の名所のみてよるさとの
づんとまででんあまりて言葉くらぬて思ひあまりしを酔されて
香もまゝならでよるまゝにも十文字をあはせてつひかくハ
のぶるになりぬ

橘樹園主人

目録

㊀ 御殿山 付 廣尾光林寺糸桜 三田功運寺同
㊁ 南海邉 海晏寺中西明寺彦の墓 泊船寺中芭蕉堂 来福寺
光福寺来迎院台命櫻
㊂ 西の山邉 常圓寺 養国寺 金勝寺 宝仙寺 衛門櫻 三光院 春時山
仙壽院金王櫻 十二社 長者丸花
㊃ 小金井 井の頭 六社 普済寺 松蓮寺 国分寺 櫻樹碑
㊄ 滝ノ川 弁天 不動
㊅ 飛鳥山 碑銘 護国寺 穴八幡 妙典寺 蓮秀寺
㊆ 上野 傳通院 白山旗櫻 世尊院 天王寺 瑞林寺
㊇ 日暮里 領玄寺會式櫻 伊藤 十六日櫻 崎島櫻
㊈ 吉原
㊉ 墨田川 浅草 向島邉

花の十文

橘樹園戯述

㊀ 五天武彌満 穀雨二三日前より七日程咲つゞく

愛るものハ花の雲のあひをして煙草ともまた花の香ともらつてんゆくなしきを滄海香朧としてうかゞふ面白きものハ行きろいまれん掃ひものいふしへハ御殿ありしを寛文のむかしくゝりせまけらしてのちよりのち吉埜の苗及名花を植おほせおひしが今のごとくなる吉よりしれて志るるふ今程そのころの金殿を思やられて隔離天目といひし阿房宮ハいさゝらねど大鵬も翔ゆく青天井の樓臺とおもひまへて渭水よかゝる品河あり咸陽宮ならて南樓にまさるものなしまたあまさの櫻戸開るるハ和漢の宮女の名ありしおのへ昭君貴妃小町や伊勢の櫻花窈窕たるがごとく椒蘭脂粉を施さゞれどよそほへるやも

ゆゑに そのむかし みなひとのちるをしほまで 始皇煬帝のむかしはしらず
周家のパアくと周日の論あれば萬代不易の栄花の御代の南楼に
妓飲不覚暁花の暖き咲くるゆゑより東海寺にちるくれきり 袖のうら
つり香は西は九州東は蝦夷松前浦風にふかれて天竺まで花のちりて
まんなかにきめぐらせば向ふは目黒浅草をちはふじの高ねそらさ
なほしこれらつゞきて雑俎にあらで放美にはるばる菜畑の花むらの
のどけくしおなめのゐるこれなど吉野の桜をうつせしもあり前は波静
みて深川あたりよりは一華あそしもまたあり又安房上総よりは
いけのゐるんざしのまかうものゝぞくづし沖の親船どもは帆
柱をならべてならべたるさま雛つるやうは花の雲をなすのめ
潮干狩人は花の浪に松どもなき白帆のちるるはちる花なるぐ天王
山の桜は吉瑞岡の名まめでたくまづさかのぼる大雪と称し因出雲の
神孫を思ひて「せいたかの下の川花のやくもなどおもひつる持徳は花の雲のふりましの

身つからく贈迎のあとをみて酒楼をはなち旅舎にあひて船
花も崎陽より奥羽までの街道一の花咲きて弥生のなかばにひらく
まさらぬなり是を北里によもくては南品とひい山の花または吉野のそ
つりまれば南まとやいそん花むらは強客のくらしと深窓の女中も
流行の妓婦も粧ひ来りて緋纏アンペラなど着さつらくよそゐ
そふさゝへ童だちをひらき或はリヤンサンゴウとあそびをまとし抗えん
でふ名をも化さまをはつまんではあるはなりきのむなたりそれよりまし
をめぐりてゆらゆらは山中にひ偏あしあるいでんぐくで咽で咽喉をならし
女太夫の三弦に踊もあり山下よりは手妻とそれにまなのぞるもあり
はまぐくつくりて果は花とならぬ子あそびちりてもよもおもふるくしはて
はてしきとは画にうつさせ川むかし今宇都宮能見堂に筆をとりて
藤倉志」古法眼は岩根山に筆を捨てん名所図会にもまた画師舞子筆を
捨ちのぞし海も埋山ともちりうんさればそれ筆をとりてそれにまかせ

まそん やゆ
あれか人ふる
世の中の
いのちとりある
花のうはさかな

早苗

国立国会図書館　タイトル『花の十文附十論考』　請求記号 858-58
ガラス使用

尚絶てちりふの身をしれね ハ盲蛇とかいふめく志づかのこゝろの
歌女の名のやさしけれそのごとくのさくらせう
慈眼山光林寺　龍谷山功運寺　ともに禅院にて清明に盛なり
此て道のつゞきに此らく麻の草原のほ草うちわたりて廣尾の光林寺
の桑畑くをとおすのふいくりなるに いとたえさびる古木あり此百年
うふりかゝと傳へたりとぞ花ハ清明のせつにいる白あり小咲そろ
ひて潔白なるあしずさくらいろよう□かしく来かうさくらんで
ゐらし

乎 まさ毎に万代かけて白ゆう雪の廣尾のひとほとく花

ふる川の古き枝みてはなちらく時の読知る桑桜花

まさ三田聖坂功運寺の桑さくらをよくろ

乎 名のみ知らぬ綱によりてやもさくらをうまんでれおほきなとよ

この庭に花ふつゞきて早咲く始まりつゞく名所なり

(二) 美南美能雲美邊　附　穀雨の頃盛之

行幸の序を貫之のうしハ女もしてそのかれ本朝續文粹にハ男たまて
ある天下勝地者莫過大井河 ときこえたりそハ山城の嵯峨の奥
にハ大江戸のはゞとふる五十三次隔ると色香争ひさく花と
名さく同じき大井にて嵐の山ハあらざれど万葉集の名所の荒
藺の崎汝辺なりきなりにたるのあとゝくハ鈴が杜でと列そのふるゆ
ありても彼浦めきて蒼の白ふ卯桜を明石の姫なるをとらんハ拙
者老人公の同業とありやせん大井邊の芝原ハ古戦場にて昔
新とんの名ハのこれど水車の川邊の花ハ手もぬらさで錦を織れ
アまさし入てハ花の雪間よ孟宗の筍を尽りおほてハ花の浪間よ
太公望ならねど釣をたるゝありて又海晏寺の西明寺邸の墓ハ花の
雪中なくちらずも讀の泊船寺の芭蕉堂ハ西明寺どのとふせなろ

土佐日記に　さけよきさ　かなてまつれりといふ　花自のこころなり

あそびて花の袂を被きり此まうでのもてなしに　予　少将や佐野
そらいでん花の香を　又発客の来福寺には今をとのぶる桜ありて此花に
いとうるはしくまで詠じそのうへ人の袖を筆をとりてかきつけ
きこのこのしるは是坊の旅なるべし　白雲坊といふもあり
その酒きよらくもおもしろければ花のまへにたちて花の本にて松針をそ
ともしていまなし　光福寺にいれば蘭奢待の名木は花盛に句へり
又来迎院の康尚の宮に寛正の鰐口の音ふかきこゝろあれば立よりて
言さを貫し　予　ゆくぐりゑとあさきぞとこれが
又ひさしをとりてかけ
つゝみその西光寺の醍醐桜はやつれて車をとめし　その桜ありし
嵐も白さ桜園　旧名を　とふ花のみのつらに御馬をとゞめさせ給ひて其後はなら
で小枝を折て是れは台命ありしと　地名在原　されば台命桜と称せり
厳帝なる桜樹勿翦勿伐　きるなかれとらるなかれ　とよみをとゝめつくりてたつるちんの白妙をも
予「台命のまゝくもあるがき大白ちよ　又大井桜ともよ
威のある花のことばなりけり
予「あらあらしれど嵐の山桜で　花さくりは大井にまさる

法華経　第十一　有七宝塔

予　又ゆく末の志ら波よせくる海の　おしゆきて八景坂の八景は去くらん
こゝて有七宝塔池より　そのもとちかうあるにかれがいたくさいきれて花のつきより
遊りぐらし花のもとによせゆくべの景を新古とよくびつれど花の景取ふた
まゝけのせいまそてあとふくまし段ありしき

㊂

仁志能耶麻邊（にしのやまべ）

それ何のよつや新驛の追分より左はそれいゝるさは枯のまはりの
うひのそれへ由く証録ありてちらくは小金井の名あり右は赤坂をもく
のゝの稜文郡へ由く御所にて近くはありの肉筋法あり神楽堂池
あの大師堂のゆかしくよき桜花ゆかしきあり夫よりこゝさくる
みの里常園寺は妙典の場ありくは八巻ありの七面社ありて庭よ
き桜の大木一本ありて是より凡二三百年斗りなりといひ
修ひされどもきくなけれど一いとやそくなくて此方に磨ぞりあります

たり 此寺へ十四五丁行り 枝ひろごりたり 清明のころ七八ア斗 開て 境内花ざかりなるべし
また雪ともみるばかり 衛道よりハふじの山の雪をみるごとくされ花の下
その床机ハ霞のごとく 花客ハ雲のごとくにまた不自由の所もなし
そゞろありきしてかへるに 館舎のうしろなる人ハ 人完に 仁田かしらぎ
まじるそこに入て 女偉を 信ずるもあるべし をさなく 幾三郎の姿
ハ此寺のほとりまで 此涙をとゞめるほどに 花下に幕をひらきて
このむものあり 此寺の宗門よりひらくの名あり 色あり
予「ふりのゆきこそ花をとめてこのむ僧も 予「いそぎ来ハ折りてあたへもくらく
九合めよりあるまじかりけり

宝林山鼎国寺 四ツ谷ふる丁 禅宗

雄峰山全勝寺 同所杉大門 とふ 禅

ここなる寺の養国寺の糸桜一本ハさくより雪の山とみるごとく
さるゆゑよりてこゝに草のさくらいろにて紫なり花の頃より夕日に
清香をたり合せるハこれもおもしろきなり
予「花ふりし中の宮のそのゆきてされハ花のころのタ月のころ

其隣の全勝寺の庭の糸桜も咲きこそれとて
予 松のつらには梅ハ信ずして古への花をとゞめいとはしく
それより穀雨のころ又常糸桜をまつり川 但けるよりの方角をさして
やへの所より東なるこの霊場一天四海皆帰名桜とてめでたしとぞ
なるこの花園よりの花ハ王と称し称うるまでその方に春時山法音
寺の花の昔ハ二三所をきゞりに移しまちむかし称ふハあしねとも今
も古来の名花ありてその方ハ指来の護り桜を女三の宮のねこも歎き
あめでたうまの方いらん来たふらん今ま桜ハかのかふの花へまた白きへ中の
せんぢやのまへの曲もあられとせんじ院の花のいろふまよひ此寺より六
丁ぶり新町よりも六丁ほどり中ふ十二をうりの杜見へさるこいつまの
うしふてこれへ鐘ふついてきひをくる洞ありけりこらんうらんとゆく
翁に語かありその鳥ハうけすぐのふてならねどつりしめふて桜ハ
鶴氅をきそて立て徘徊をともならん池辺の花ハ昭君ならぬもうめ

ばかりし境とかくせられど茶店ハその境をとらせて作りかけてその女ハ
花に白ひ大団子にハ氣まへをこらせてでんがくにハさくらをあげ大盛にて
玉川てうちはに花の形をかりてまんぢうにまさるさもありれんげ名ハあらう
せんとこうえ渡ぢしにハよくらうてえかし薬のらんらんよりあがめもちもちの塩
ハあるさよりのでさき糸けいハ思ひなりてこせぶんなれどど花の香さら
ぎ水車ハ白くなりてこれをひけど花なしこゞでしされバ此世べの花
に桜ん本當をとゞさん来てこのしむもの茶ともりうつハ本當をとつかみて
すこでのむかありなどいふハわろさいつもさてうんさても茶の美との
御製にもらひ出られく

那にかく王のこゝろえもあれかしとも花の亭井とぞん

因ニ 菜花拙語ときてあ茶に花山院とこうしやらぎれはりかせく滿ひて
無ぐ桜のんくに　中略　うら桜もとのに形におかしきりして　桜の色もしらおかし
ろさまぞとぞく

御製　木のもとをすみかとすれハおのづから花見る人になりぬべきかな

長者ガ丸　白櫻亭

いにしへのよしののこゝろをうつしてあまさせたるひとつもとの花のこ
ゝろふかくこまれるものをとりあつめてありのまゝに一目にうつし
たる花ハ面白しとめでゝこれに限りなくあかずして花下に立帰らせて
よそれを誂るあくがれわのるべし此まいぶなかしくまめでいはぬこと滿さ
らめて思ひいれとさかりふんのうちにハ名に花の長者の丸にて景雲と御
つ瑞雲とよみて一つ清香ハ白櫻の異名と共に鶴の九皐まできこえり
後の笄橋の異名よろしく保ちましてこれ壽をたもつなる亭君いたるゝ
の小枝をとらせて是ハ御衣黄ともなつけし花ぞ殊にめでたきのみな花をと
ゝのへしきの實りあるに又花鍋りつくのあるふハいろこそかくて花の
ちんるもれみつしかれどいでやらの王観が芍薬の賦に御衣黄ハ
の名ありてたわゝなきこそのりこえとりきこれハもちろんこれハ此本の

桜の絶ぬ清女がきこえこそにも てるごとくにてこそうるさきかしらるるといひ
たれまいて
清少の名をおもへどもされバまてぞまよひぬるる春の花の大かた
又二季桜 付るをと一株つゝてされハ九重桜と云このの かくるふさく
ひあらじ
寺 此花のさきてよりさる花まてとくらべるおのへも九重さらく

㊃ 古雅念慰　穀雨より五日計前に至りくるに満開あり

桜の古木花爛熳るが小金井の流れにそひて咲つゞきたりさるを
堤の上ハ花の滑をしきたりるあぐれバ雲の如く波の如く一里半余
の程をつゞけるにて北の方ハ引つゞくるの花木及南の方ハ繋にハあ
らで甲府の街道東の方ハのつゞくにて桜の花の弁天おハしまして池への
花の壮観あり西の方ハ天平の御時建立ありし国分寺の薬師

山上にまつせの人此川を元文の頃吉野及諸邦ノ名種を植おかれしとぞ
さりるに今ハ何れも古木となりて花ハ一株ことにまかれて大木ハめぐり
三尋計ニ百年ばかりを経たるものまことにさかひよく屋並にもて白
波の紅の花をかめるとおがめる文流れに花の影のちゞくるけ口く
廿ノ橋ハ天満橋ともあやまりぬれも江戸より 六七里の程あれバさる也
ちる花をもあり或ハ家族をひきぐしてる 花をたのしむ三勝の勝連りたる
もありおかしくやどりて詩歌連俳などもの作る 就中小金井桜の
あたり勝地なれバそこの楼上まで遠くまでながめのこよひしつその深
に古社の陰をもづ境内に鉄仏の立さまりそこハ甲州又深山の路筋ふくくもつめも眺る
らし三陸ひろさらくりもさこの西又ハ善済寺ありしく石幢をとるなるも
あり川をとりて松蓮寺の十八景富士 秩父嶺 両澤山 筑波不二 川岬
をとりところされ林をたて玉川の流れにそうて白花をとひとふさい川のちなる如く
花のくぶれるハ針をつくねさる小流くりにてのあかをきれどおるを見て

みわてきくるをと
花さかりて銀世界なる小金井小鐐ハ小判のことにかよふか
因云 武蔵野話ニ云 所伝 蹟考編 小金井村ハ小田原北条氏の比上野国金山の幕
下にて小金井四郎左衛門の采地なるべし 此時小金井十郎左衛門某なる者
などいつも又子孫の者なりしん今ハ此村鴨下星野氏などいへるものよ
村の北を西より東へ流れて上水ハ羽村よりきたりて多摩川を分水
し此地を流れて江戸四谷にいたる此上水に小金井橋といふありはし
の左右一里半ばかりなれバとて桜樹多し元文二丁巳蔵縣官の植
られしハ桜実の水毒を消すと橋の小西に桜樹の碑あり又東都
歳時記云常所の桜ハ実生のものなし植させたりといふ後享保の頃に
いたりく吉野桜川の桜を種をなしたりとて何れも単弁に
潔白くとこえたり去るにハ再度見んにもあらずいづれも丈
ありて中なるさきてやさきいハこゝるん計りありけれバ元文の頃植しとハ

どいわれり花ハ潔白なれバとこそ桜なる草の中なるにて若葉も花と一時
に芽をもとろふ吉野桜川両種といへど今ハたまに二わの花のあるらし
小金井より西一里よ国分寺あり右山上に薬師堂ありこゝに聖
武帝の御時国分寺建たりし時の本尊なりとて堂の前に角の
棹石にて碑石ありけり 高さ三尺計横二尺余あつさ尺ばかりなり 石面額に武蔵国府中国
分寺碑記とありて石面に在昔聖武之朝云云と裴寛にて十六行の
碑文鐫(ゑり)て文末に宝暦丙子三月摂津服雄撰東都河保寿書と彫
付たり国分寺より府中よりきたる道にて半里あり○六社明神
の社地にまします後の阿弥陀の坐像丸さけ七尺計ありけるの光
古くさる也武蔵野話にも鳳凰との世より在ける縁付て文字なく
あり建長五と右書にありけれど寺よりこゝらにに建の字といへるから
ず延の字の事しかも筆法うるわれどこれまでもなくわかれど○府中
より西の方へ街道二里計り行て立川(たちかは)といふ所に普済寺と云なり

こゝに石幢と云物あり青石にて六面にて一方の闊一尺五寸ばかり高さ六尺計り蓋あり黒石あり前の方二面に二王をゑがけり余の四面に四天王を細密にゑがけり上の方にはかゝしの字をゑがけりより南畝莠言に漢土の石幢のごとくなりしを此石幢ハ延文六年辛丑七月六日施財性了道円列と彫あれども後に彫るものと南畝子の考へし府中の南廿丁計の蓮光村富沢氏に往昔玉川の搗布の石臼と云を一所蔵せり

高サ尺八寸 渡り尺寺

夫より稲毛松本山廣福寺に詣づ此山に稲毛三郎重成の墓あり且佳景にて桜の大木四五本花爛熳たり小金井の桜と同花にて盛も同時也

小金井櫻樹碑文

校 南勝忠休明夫識

犀淵上條子藝書

肥前守藤原義行朝臣題額

武州多摩郡玉川上水小金井橋上下両岸櫻樹

有廟時川崎平右衛門定孝之所種大凡古者十里餘今二里間

小金井櫻樹碑

千株餘云初定孝及武野墾闢役與而有功遂解褐司郡於是乎請而承朝命採芳野及諸邦名種雜種之郡民子来封植亟畢實元文二年丁巳歳也其擧慮衆根深入堤中而長無壊朋之患則両岸樹數均而南岸葉茂北岸花盛者豈徒哉相其陰陽度其便宜春隨艶陽悦往来目夏障炎光使行旅憩且用花鮮美暎加清潔落英繽紛浮不汚穢又且吾東方醫家一二方函櫻茹及花蕊用解毒剤則水毒亦可解況両岸千樹相蔭暎直流径入東都何毒之有宜億兆爨炊之用煎茶第一之水所薦於鬼神羞於公矣誠忠用心庶乎仁政之一助哉前十餘年余誘女婿石子亨與郷里親舊歴覧多摩郡中名区擇優者八所與子亨議定其目各附題辭審事實其一金橋櫻花即此所也遂題為武野八景梓以公乎世於是人察奇勝欲一覧者不尠爾後遊人毎春相倍蓰野路緜緜肩摩馬蹄連騒人詞客吟詠相競異説稍起余恐吾

かく百とせ
あまりあまり
みし大木の
あまたとしへて
ほころぶさくらなげ
なくて吉野の花の
ちるらんけれどなれ
いくとせぞ
ゆくえんとく

早苗

さひ木もち
いきうひのある
さくらさる
いろまさるぬ
尚歯くえ
うる

八十二叟
画狂老人卍筆

国立国会図書館　タイトル『花の十文附十論考』　請求記号 858-58
ガラス使用

題辞相混乱以為鹵莽与子亨同就定孝孫川崎平蔵于押立村
貿訪始終三人相謀刻石防違乎示世銘曰物之隠顕遅速有時
千株之櫻十里水涯両岸相均初種者誰司郡定孝従何致之芳
野他山遠採爰移多種夭夭争美花期瞻望悠遠若雲離披主人
慣目猶未甚奇況都人士豈曽聞知俄然一顕遊客追随往還知
識先後連騎時哉今顕盛賞花宜稱種者功功亦盛馳

文化七庚午年春三月二十一日建
石之背ニ十八人の住所名刻有之爰略

⑤ 多喜能賀者

聖蹟の前からゝけさに煙雲をへだてつゝなかうきてみて堀のはしを
あけてゆくのしあまりに山も桜さくきを山をのとゝらさされてみちのくへゆりハ
しさきれたんちゝの花ハ源をとゝきしれど古ざれのせりふをいへバあかり

ふるくさき石標立てりこれハ金剛寺のてまへにありて桜をつゝみありてみゆる
時弁天にまうづ桜のこかげに茶屋の床机のならびたるハ花の波に筏
うかべるかとおもへバ白波のよるごとしそこより坂をくだればかるきぬど
ろ瀧の川の流をはやみにて板橋わたりて山より山をみおろしやへの桜
ときおそきさかりしかばちるもあり咲つゞく花客ともひしまむらがりてあそび
詩歌俳諧などに興ありて又いざさらばせんどのせのにぎあへるをあそびれバ両
山の花の桜さし出て枝をかはし咲みちてみるハ雲のかけはしと見へめ
かゝる川下にハ緑樹繁茂する巌窟より白糸の乱れおつるハ是弁天の
瀧なり流るゝ花の中にかくれてながるゝ瀧の白きもおもしろし不動
陶窟裡のむかうにあれハ 名の法守るまず良さく花の こゝろまでさきの花を見る歌 川上八王子より
流れくるなりむかし浙ゆまく不動の瀧ありとぞいひてとかくなりて
向ひの山をながむる坂路をくだりつゝあるところにいふくりのむかひ方とこそかく
またありかくも花の雲間に天女のあそぶかごとくにてさながら山上の宮居を

国立国会図書館　タイトル『花の十文附十論考』　請求記号 858-58
ガラス使用

月宮からはやまかれぬことより王子ハ花の雲浪をぬけゝら取り
さて花のうけあらそひてこゝらせバ中々隅の川ちかづれて両山の花の
爰ハおもさるハいつぬなしきあのをまづいかせ山をさとて さ扨て弖
そこくあふ言ふゆをえてきさの桑よ あとよりあいどち桜をとらざつて ひゃく
いろしらむまゝふいかせ山ヶ那 むまときゝてくゝつゝなる床机ふよりてひとりがまづ桜をとりふけく
のくてらつかいふんろいあらくずてんとくまつぬ咽のあるハ腋水ありまさ
のくてはそのあるハコウト 劉伶が頭巾でいまし 濃の水車よ志らる鴻の
ごとし又いろハ玉碗よりうきてくるこそくのひらりよりくのあの花の
つまふ洲くり出ても御車のまりとふいふ取とりふどくもちのこの
まう花のちりくるをこいふるかがつくざくの宮の故事まふよひくる所れ
とちとはくらく雄略紀のあぶとさすぐしとらへ取られハいくくされしく
とんがくりしてうけんとくうるれバ又ひとりがあんざろわららねくさるのは
のわるくひねりあまさるれ花がつくいやす ハヽハア

亭 隅の川の此苦の文ハ十七世の学をしてまかり花の此ころふ若ふのまりく
桜ふてまく取りてりきゝふらくて赤ふ桜をとらろまふしや

⑥ 安壽加野満

承平を清宮清まて ヘナリタヤア 倩ふもまてはいとらあいとらいとの比ころハ一十三と称せと
いふそ青丹田ごされはしまを始てことの時のうわさおりろさ見まふ谢り文苑り今又これがらめ
て八一の名ふしぬご桃桜の花源平ふ咲あらそひまおぐりこえふらでせまふ塩物じ
とて桜ぶまぢかなり塗ふ浪との和ハ平氏ふるべしと荒川をとらしふりくりされバざ
京ふぬ六おとごふ母衣桜匂ひ文将ふ衆枝ハ咲あらて青まぐりまいめだちしひまぐし
あらであるのむ境ふて安妻ふしぬ一西信の山も浪おふこえて熊谷あらぬ熊野の家
もつまふ浪をけくらうくこつきくるハりのふしてく山桜の昔あがくふぞろすまあり
りくこで蓮生の墨染姿の山鳥の鶉のかねなしくし花の波とあふる
碑の優なるをまつりて此やぢひとまづろそをつくるふかふんさて二番めハ
幸田浪の海より隅田川をとまでふるぐ〳〵山の宿をさてもまてハ卖ふとうり

国立国会図書館　タイトル『花の十文附十論考』 請求記号 858-58
ガラス使用

頂ハてんぐくさまさならぶ修やかて入也一夏などま高さなあるきこのうつゝめつる中うれ
いあくまで四角なる碑をひ稀り巳角なくてはやくひか程出よんぐり
そこでハかちぞかてのやく枝ふつけりしこでハ小ぞくなのさくら
せんとこのこゝむく稀心すありあるハ乾す桜ふつれうぬ弱くくり程ひ
いづるまありぬるハ古号よなが花從ざんでとふてきぶり乎とくつれバ古方老なく
たくぬくぐるとまのさせきまんかりやなたぐさんハおう高ひ中むきてあんり
奴の所作をともどくせ世の八内をあらけふふしながるん行るまままん
うり川見ハリウヽめりしてあつてハ チエハ大の大助あり志のをまきさ
きら稀んよりだろまるがよ手ふて、のる桜のしろきゝふハあれうられ
げらん「人のこう花もワつのくう了し ええさを許まて見かまつるを まさいふれとくりうまくのく
くひのれをつゝ稀くえんびやうり春へなりゝくおしまされとよみ
扇やよおつくりまふかありうつ橋のあくうりふさやるくみまとなつく
べおきさてこのくりをとうまんとよ川あり家くうり繪の折りしくうぞろ

まきどうざりてこゆるをかとめて まげかさして又うんくし金湯寺
よりゐきさの川くゆくことあり花のなこゝるをちどりあつはなふつくうんハ
くるまありゆくことほりあわまくく 「だうさわぎして流をくぐる
ま了のお花くきくどしてうづしゆくひゝづこの梳
園湯云 さるくの岩出あざらへいたくし あまま人の岩あるの鬧垣ありようて壊所ま
梳所 のあはを子て一の岩の狂言せりそれゆ名流行ふとりまわうれて しあはかの
石碑のいりきりかあれど ミツチヤあるところありてよあば志うるり宵燈
のあのせしかえ をよられどもうちふれよめしてきと あまるを接合してま
碑をとてこうふえりして喜楽のこみふとよきぐじしてかれつとをせられる
来凉雜記云元文巳未年飛鳥山の紀を冷泉家よりまさられるれハ
とる枝の以つしせんハ飛鳥山花の木の主めいるれし」為久 とふ乱あり
しゝ金湯寺ふありとそ
碑背ニ飛鳥山四至傍尓自艮至坤七十三歩自巽至乾二百二歩
高六尺八寸幅六尺余 ありしほ戸志ゆゑとそくり

国立国会図書館　タイトル『花の十文附十論考』　請求記号 858-58
ガラス使用

飛鳥山碑

惟峯國之鎮曰熊埜之山有神曰熊埜之神實　伊弉冊尊也配祀
伊弉諾尊事解王子或稱之三神事解別為飛鳥之祠三狐神副焉
語有神史中別録藏焉誌曰在昔元亨中武之豐島郡豐島氏叙兆
豐島郡為熊埜神座地之曰王子山之曰飛鳥盖自此始也熊埜之
川曰音無川流象焉爾來四百有祀土人以旹祀之如一日矣祀典
曰熊埜之神春以花祀鼓之吹之旗之歌之舞之今之王子祀日鼓
吹旗歌舞者其來也尚矣而世之邈祠宇荒壞風日不蔽越暨寛永
中有司奉　命祇飭祠事乃因故兆新之遂遷飛鳥祠於本祠飛鳥
之山右名無祠者由焉三狐祠僻在北叢云今兹丁巳春三月己亥
我后省畊之次覲土封飛鳥之山獨給祠無所與永屬奉祠者衛
等恭奉祠乃蹈舞摻手稽首敬凡之曰於穆我　后事神以誠治人
以明揩則正施則行以諟樂郊為神之鄉神其不歆明悳惟馨初飛
鳥之山蓬顆蔬壞雉兎徑焉　車駕之肇從紀蕃来也有司行邑吏
容谿谷道泉瀑碧碚磐硐洞而旋乃植花木數千株内成游觀外便
蒭蕘雇役數千人二紀之久猥大為美土花木亦為林毎春旹爛熳
焉豈惟種蕃種乎祀典所謂春以花祀者冥契會之奇非邪抑亦
國家之脊也遂鑱干石以為表經銘曰　綿邈洪荒有神開國垂跡
峯紀東土是祀明明我　后來封其域神之眷祐豐穰薦至本支
繁衍其麗豈億八埏懷仁神祇御食悳千載懿範之石是勒
元文丁巳之秋
奉祠金輪寺住持權大僧都宥衛立
東都圖書府主事鳴鳳卿代撰幷書

あらしやまひめいのことがき

これらんもくのちんでまのいやまとらへぎんありでまのこまんとらへおつはらはなはのこふとあり。
いざれぎのことしあらくきやうじとありますり。あるいはこれをまんじんともうす。ところきぐつ
よあはれのゆーろをあす。さんこのことそへ。ごいえんしちうべうろくはあつてござりますあるらく。
むつがんらちくふのしまどはりこしまうぢでもまどはりとそうてゐしてくわうのまんざ
こまうすちとれをやうじゆらへ中まとほもとあすとらへぞぶしこれよりうずまうそうへのたの
うへおよふとらへせんりうこれにかくどるぶらとらへ中へゆしじんことをもつてこれとなる
こへちちうのでし。ゑそんまいらくまのまんぞるなまとありてようくとつもし。これなる心これなきし
これをこうひこれをまひ。ほまのことふじのまでうほをおそつまひするのぞのきこるころもじおもつして。
よのそくしう。らうらくるひ。ぶどうおかずうてかうこんへんちつてかなんで。ゆうじめるとおじてをぞを
ゑしよまうす。これならそこへやまり。これをあらくろまでつひよはなそのゆーろをそるんしふうじおもそのや
まんぶちうてまつりあきとあいこのやまるさんこのゆーろも。ござじてやきこまあつたらへ。ぶとしてその
あるさんぶうきぶいづそこしぶゆーどころのつつでつちあきしてあんのやまとあうじひよきしし
あづうとこうほ。あづくちしもやまぞくし。あへらうやくしし。ゑをありしまれいちとふかまへしも

けのしゆつーんで。これをみーてゆりく。あつぼくうりわごさんだまんなつへりやまうふまでとゆうてす。いはと
あちきむるふあいをゆうてす。おけなこれはちでじくむどこせいるまちぬれ。なのらくうくとゆうてものをふる
とまうすまんそれからはおちらんやかいくくこれなるたじぱかはもちのやまそらくさぞむおゆう。ちとけいすまるおう
のぶおてきまんよくきころゆへじ。ゆうりとおつかひとくとがくしやんだくこととちびのかくからく
かくくわりてむろうしてめぐるすれなちくぶかくゝすせんらうしくうちへやうそうんとあふしそこへ八すうぶやう
ふじんとごろえをごすせんふんおうそのきうわいぞのびゝそのおもつぢくおまくちゆうとあすもあんしぶらふ。
らんまんこり。ありへくぶぜんしもとこるのことふへんや。あとんのゆるそるなそれとすうてまうるのやのけれ
これからまといするぶきうひぶふんしゆしまとこくうのふまりぶひまりやまそうてゆうてはけへまあすめいはいく。
やらうくさうくやう。じ第のふぞひらくおとこまんきまよれしとこるもしまろなめいくとうつうごさきてろくてその
おきくとおうまおんのくんゆう。おうちゆう。おきりまへくるかんしもんえんぐのまずあゆかまんや。あち
えんむんは。まつ。ぶうちきよくもうくせんさへのはまんごめうしこれらくす

ろのつひでは嘉永膳あるはまうづかるちるはまづらく八字膳のくる何としくされ
らうふうのこれ見まぜてとよろこんは。おひまりふ示く経冊の付てこゆるをと

花の盛りのかほりをとめてあらぬかたへせんぞくだりのあしをとゞめて申
又高田の穴八幡の花もちりかゝるあたりのよき地なくつゞきてうつくしき
うつくしき枝にむれゐるのうぐひすなく
此あたりぬるき枝よりちるのかげてふらぐ花のちることの外
又市谷谷寺町好雪なると蓮華寺の糸桜ハ名花にて清明の頃盛んに
さかりにハ花らんまんとして風にちらずひとゝせ人まよひおのれにて
見はらしも花のむらがりさき風の吹ごとにあらそひておもしろく

⑦ 雲閑能(うへの)

東叡の山ハよのつねに云ふ所にて信夫(しのぶ)が岡の女郎花とよミし八字(法文字)津の宮の
名所にて室町殿(むろまちどの)の花の御所にかはらぬ文明の比道興准后の杖引ありて東が岡
の松がえに休らひてよき眺めの比ハ此所にて(田舎遠)大永の比ハ在所にありて上杉
の城ありしを北条氏綱(せめ)責落して古(ふるき)事をとめおかれしなどもおもしろけれど

うつくしき詠めて

万代不易泰平の基をひらきたまひし
東照宮大権現ハ御代の天下をしろしめし給ふべきの御山
御城より良きあたりとて寛永年中慈眼大師草創ありて大師よしの山の花
をうつし植させ給ふあひて江戸中の名所とまうけ給ふと(附)此ハ江戸をまもりの山
より上野といふとしるべし見る人ありて東叡山のあの桜とて
見事なる花の開けたる比日のまた風又享保年中に此山の花見をゆるされ

きこえて何わらに実に豊饒なるをちせり此寺の何くりも盛なるがゆへにてあるに
とりどりちりくて清水のかうひ山ハ花さかりけぬ花もさびしいふかどれ花と
そのかげにさかりハさしくまかへん時のゆゑハねがふ所ハ此花ににほひ桜戸
ハ白く黒門ハ名のこるあり車坂に車遊しの花に名ありて摩尾坂の名ハ凡
を忍ばして下がひのて六ハ尤びたて何をび六くの坊の花ハ多くくまならぬ
されども大師のをしへどとくせんのぬくふう寺しておれバ六千三百八単に大吉
よろく七千五日ハやがて大吉く吉祥閣七寸がくん八花にかゞやき其白雲をと
再ひされバ紅顔の天女がまふともあやしまれかべをめぐくせバ白雪をもち
行あそびに十とくえ地りあれどハめにつかねど清をふくむ美をの錦をとよそほひ
くれなゐのけぶしいかるがせにちらつきて山中せましとむらかれるハ蓬莱宮
女の徐福方士が求めしハ此をさしくずげに江戸名所の花のあまりあらちに詩
歌をられの多くひの此花をそめて目長の事も日本をこじめくあかに屓し
きて文指しも此花の天気も格にて江戸稗希当と申さるるハ名ならる寓寺

ことさら津の連中とりや〳〵まつり付くる日ごさいくぞくもさごされ又を
桜つらん日ごとでかけまつりくるといく百年かさしてむらがれるいつれをの
花の銘どもまたけに花をさくしてあそびを考へりかまひをあら望み一円に
・よそ方ハくるごとくのしこふむまつ杯びあらげちらも山をめぐるあれバくるまつら
ところ江にありそてハその遠を植る木のをまと此てすまいのつくんとも
よあれ附る花の大関のよせくるとおとろくだくりく又いさくよ春まきねや
の連も同しくてあんしいまほかれどねきしの花くのむろの花摩さくうぢ
のうまや小松のうつりにかくる大都会の花の名ハ大体すかてまござり
く数も阿くたれど阿く作りすて作りさしつ
又所々くの糸桜の大木の名花ハ皆ござんじしと筆をとくめつ
同し頃でんづう院の本堂まへ及寮の糸桜を清明まるろ上に七八分
咲るハ須和もこそしいぐし
三月 中るかせの寺さく花のこれくしいその作くしなるへくしむ

早苗

清水の蒲香ゆく
ゆかしげや
あかこれるれか
又あそく
ふとんざる
清水の花

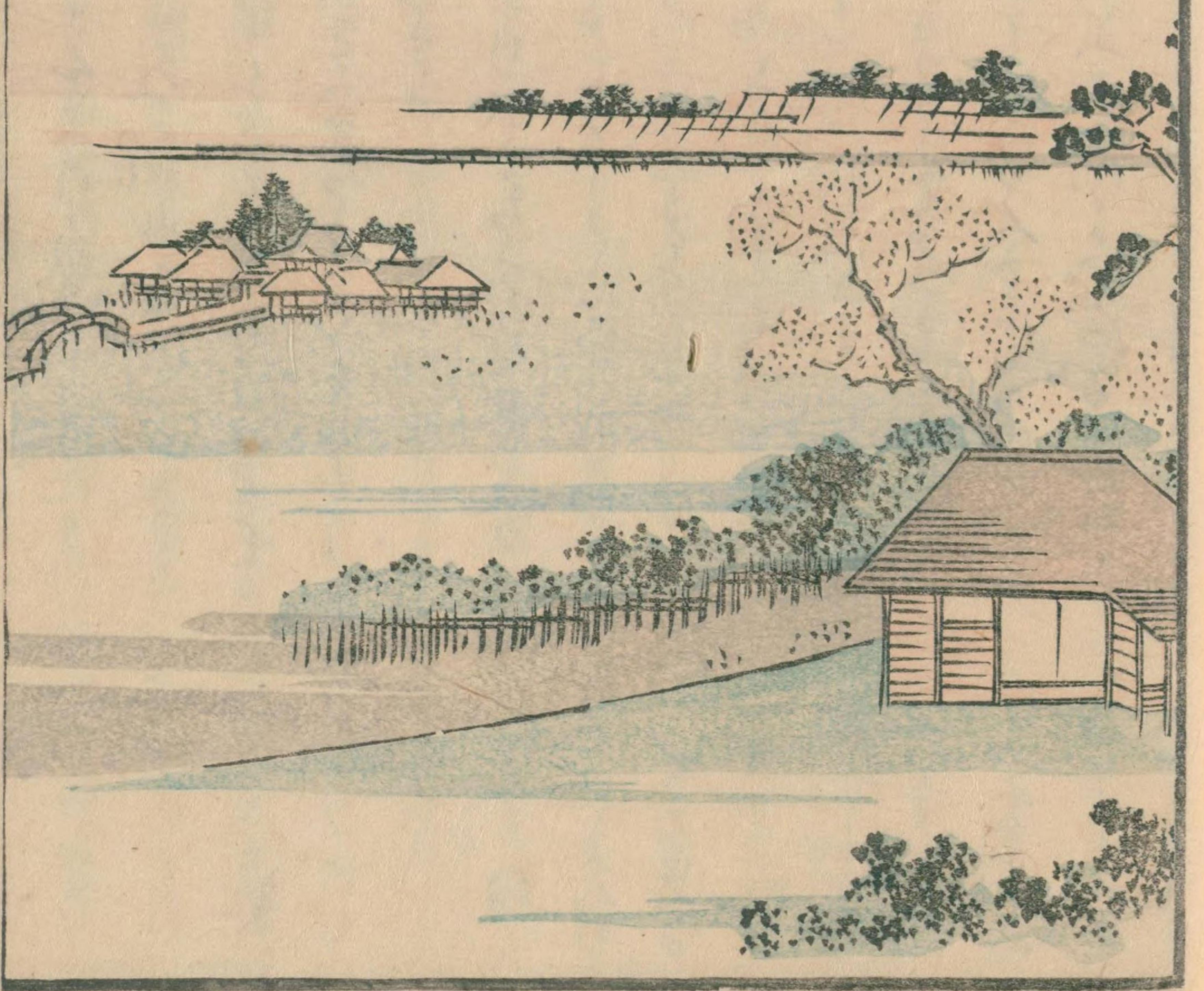
秋を桜を　仝

白とこのふ
ふりの枝の
いろうゆく

花さて万年
ゑんであかるる

醉戯　嘯齋

文殊樓上夕陽
情
忽謀數心北國
櫻
一味連中手打
極
田川斬外煮通
行シ



又白山社のたゞ桜をと清明がこゝ宮の白のさかりと見れば

予　白たへの桜をさして八相まで世ぬ香水（のむ）を見わきるゝとなりけるを

又千躰仏の世そん院の高き桜をとふ清明に咲ちりてちりかゝりけれバ

予　千躰仏の前に白ちりかゝさく半てさく花のちりし見ゆ

またより文穀雨の後ぞ盛を見せる

八重の花ハ見に遠き所にちつて白ひきてハ葉ふかくつくしく増く

のも雪の如く咲わかのり咲ひあるハちりしく八重の花も雪の如くやよひの

弱りも見ごとに咲ものかハ足までやつれて白く見えバ如何してこれよりくもある

是もまた咲くる香いろの作り物なれど葉も花も後追風のかけわきるゞ

又池の端に咲つどひくる風情ハ西湖ハはるゝず此花は白の咲くる

けしきハ雨奇晴好のよそれをなのがしてアヽとこゑかゝり天王寺に建ハ

いろ〳〵に山中花ふかく雨の如く又こゝ人も雲の如くながくて白雲とこそ

れど東方をやくかゝりとも名て追風はずのと　瑞林寺にあるてこそれぞ

さぞと古来あまさ咲りて霊験（ふしぎ）のまにちりかゝるハおり〳〵諸所言説皆實

不虚とさとらんに誦経のきこえたるを

予　白雲のさらにちる花ハ法のあにちりまた咲ひちりけり

⑧ 非愚良志（ひぐらし）

浄光寺　妙隆寺　修性院　青雲寺　江戸志にひぐらしの里

本行寺

よ継の花の作きいろはをとりてとなれバちりぬるをまし「日ぐらし」ハ花の

作りの折をすぎて「ぞくに」そよくたんかいひて此日なふきてこれバ入あひ

のかねより暫の後に花ぞ咲たる情もや寺の庭なれどおのれ〳〵の心

みてこゝあびれバはれをとらずして奇石を行しらひ作りしさまよめの径波よ

きをもふあり前栽植まくに四時の花をえずさくいさき勝地なりたぐひ

日暮にくらさんくの御ふとゆゑに花紋の佳境にして隠逸の老

人も深宮の養女もこ此中を歩行して足をも誠に保養なしてしけ中に風

流なる趣所なくぐり雅客ハ詩哥俳諧の意をまくゝのゝこそあめぐてハ稽首を

ここにいたりて碑ていかにいふやうもあり或ハ寺子らハともし琴三絃（さみせん）の師弟
まじりてなどむつまじきさくら花ちらひて娘たちハ芸をあらそひて諸の方すゞしと
ひろく遊びして花しもかなしきかり山の音のかりて八日暮神明宮まつり
てさくらより見ることせバ花の盛るに三月ちるくなるからかげの山鵲のひら
やうのびくつとおちかるけあさくり八景にさへ變して所々の名のせられどけるハ
延寳の昔さし君美子ハ瀟湘の遊（あそび）をまねて諸所にあれバ支那人のまくら合
いかにとて見さきより筆をとるくずしとでさればこその飯諮社ハ月のうつりみて
見る月の秋ハ眼（まなこ）を文殊（きらく）として根岸三河島の田舎の趣（おもむき）をまねで荒川をだ
ちくまかい声手の池をまつのうさよりもおもくつくぞ日光にかけのうつしを
うの花の山くへふくぐひく王子道（わうじみち）の酒（さい）ひハ本首塚の側（かたはら）にして姨捨（をばすて）を
勝母里盗泉（しようもりたうせん）とよくむ例にてらにハ擬（ぎ）せず續墓山より月の出るをこのの
あるてハ五味噌（ごみそ）とあぐて雜司（ざふし）ヶ谷奥子なまされども東海（とうかい）よさくり
なくもんと此のかりさるも四方（よも）の味噌汁にまんぞの奥まん川の酒より見て

ゆえびくるかへぶつくもあしずりかうハ時あくりハ福神つどひてふかおいせバ
宝（たから）の山とみえて千金の春の色より一時（そうき）の栄花（えいぐわ）千日よむかひ
て千歳のよはひものへめでんて又いかにけるをおぐるに大鵬にかひでさまへ
無翼飛行（つばさなくしてとぶ）万里（ばんり）の春ぶつくるん山をてうかずいの目いれバまどで比ぶじ
のさとさわぐりとでけて山神のこゝろをおしそらつく
ふつくぞくころし山のなくらと花よそらふこえいぶ〳〵しの里

谷中領玄寺 日長山日長上人 身延の隠居寺こ の會式櫻 但し砂子まつり

天保九年のきさきのまつり櫻ハまさ〳〵ちりのこりてひとへの白花をそらうし
咲かけり
寺づゝり花かつくもつされども咲たる縁のえにしのかんや
因よ云西遊記よいよの表松山の山桃（やまざくら）いかなる十六日櫻とて正月十六日ころ
さきて松山のものらにしもとどでなきし太守冷泉家へおくりたまひし時
の作也香

十ツ桜と云花をこそ[illegible]むつまじき実の縁りにおもひしに実の花[illegible]
よき伴ひてなまめかしくさく[illegible]引り[illegible]
きさんのる[illegible]これハさらしくのむつまじさに似ておもひ移れるさくら
去川さくらの 柳のくもめ これにまさる 別称ある[illegible]
おもひでとちらさぬ乱のさまよりまさりて 人ある人の こゝろ[illegible]
[illegible]
[illegible]さくらの[illegible]桜の[illegible]
又蘆州に八橋[illegible]桜あり[illegible]
[illegible]桜[illegible]八橋桜と
[illegible]云[illegible]
[illegible]と云ハりき[illegible]南二三百里の[illegible]

⑨ 與志者樂（よしはら）

李延年が武帝に傾城ときこえしを皆の人どもの旧詩経に哲婦傾城とこそ
て美人を称じたりしを今ハ遊女の惣称となりたり又詩経に漢に遊女あ
りとこそ云て水辺の謂にあり墨田川の辺に地を撰びたりしも[illegible]
[illegible]や花の[illegible]の中の丁軒をつらね青簾半まきあげて綾羅の[illegible]
[illegible]のつどひて[illegible]
[illegible]花の白[illegible]
[illegible]桜[illegible]世[illegible]一生
の[illegible]遍照[illegible]例の[illegible]
二三[illegible]越後の[illegible]
[illegible]
[illegible]文[illegible]の[illegible]
[illegible]八[illegible]馬道を[illegible]
「今[illegible]花[illegible]」尚書の[illegible]又[illegible]

きよしとうつらん所へ行らく 予「此ぐくさハ白楽の衣の青梅と色をと
ちり香をえんと凌寒梅ちもあろされ何かハ春の清風の人に告つめらん

⑩ 壽美多雅波

東にありといへども ぎせんぐくをまさつ川にも中将のむぎきはをあん郷
をの名にしおくくこの都とありしこそかしこれ古くハ万葉集に 亦
[illegible]新山暮雪行而盧前のたるにかくこうにも[illegible]詩文山と呼ぶ
ましもたしきたる弁基が歌を田口大夫の誦射にてされバ[illegible]その[illegible]
のゆかりあれど紀の中にて宮古びてと暗有にも支那にも鄂州の赤壁と
東坡が賦の黄州の赤壁と混じたるが如し 梅花無盡蔵に隅田に梅
若丸の墓あり 梅ハ北白川の人ことなり 盛衰記に源二位陣を押出て
太平記に等持院殿ハ石濱にきたり 又古説今按に玉川の牛渡之云」 廻国雑記に古塚あるをよん
んの二首あり玉葉にも[illegible]新拾遺に御製あり 万葉集

に[illegible]中なる寺のしよう[illegible]のひる村の紀行にありえ[illegible]なに[illegible]てしだくた
川あづまの橋のこなたにて浅草寺の大悲にして[illegible]金のたあさにも絵ある[illegible]あり
るん古法眼の絵あるハ今にもあり 三養雑記に説あり 五層の塔ハ花ののそこ花乃
[illegible]の楊枝こそ世ハ娘をそこ[illegible] 小里の花ハ[illegible]山ハ聖天
の利生と[illegible] 従葬にのこハこちの[illegible]衛道にて 堤の宿より
ハ二艘ぐ[illegible]世 日本堤の花の雲ハ二[illegible]金波二[illegible]ハ川
ょのぞく楼上の客ハ花の香に[illegible]入て八八百善田川やに酔
て[illegible]月ありて[illegible]
予「[illegible]」文[illegible]
[illegible]宗[illegible]
避[illegible]
毛せんに[illegible]人ありの[illegible]
馬に[illegible]雲と[illegible]ハ[illegible]の花にて[illegible]桜が中に梅若の祠

ハ柳の縁にそふて酒楼ハ人にみちてちとせ入てくれ杯の洞の堂ちかくに子
らをあそバせてやりこをつかふなど合ものなぐさみそこより三圍の堤
桜の古木ありあひて花をくぐりなから行ハあげに休所かけつらね酒
食のこぶひあるべきさくらもちたべくらけ又さく此の雲雀ひまれく半
里計の程なれバよく桜ありたのあくまで計り中きつくあるを酒をのむのを
どりあるくも花に白ひ合ぐり手のごぜんきらひげあきそこらべりのあ
くりすべく向島と云百花園ハ江附花くえまで又万花を作る園主をと
あり雑子松を作る上手あり鯉魚硯の名をとられど山海の珍肴をと
調ぜりとをゆる平岩むさしや大七なぞ温泉のまねびもせり程ちらありて
皆楽ぞかしてつおれのさかなひの中に執なるのやうに花ぞ雨く乗りまへく
ちゐるのあり岸にハ詞をつくしありあまよハ網をうへあり魚ハ取り帆かけに
ハのがりたのしくハさくらちる下でりに纜あくうえ又ハこれくま接さそこの中
くんの緋ハ花に映じてさきそて紙ぐいらぞそがんとや女まかくせ侍女殿

冬さつききくひ太眼にハ月がさきとうぶくせいくらせあくに錦繍のよそほひめかあ
やかなり又ハ吉原の花見ハ仲之町十余丁人花かんざしかぶ中さつひそやり袖
に安て遊女二三千人花中あるをといふ中遊ちりし花の中の又花らんまんなり又ハ
舟よりあがるハ深川の高女あくりの妓婦柔和ハ常をつれくるさらにく
れあるべし桜をバ舟のうちにをろかして酒をくべのちうつふるぶさくるる色
どりあらり又これ家ね八園生にふらるんてゆりくれありさきんもくげあらで
まめぐひあどよ貝をとく世どいろぞや義経よありしそれとまてるまてくり
又ハ小中うちにハ三絃の音波などまろうつきしふつあさきうる寂寞ハいやしく
見て作りしといふすいの柳笛ときれバ揚由や兄をとといふこどくたれしるまの作り
又ふしつくるの煙霞とあふうつる花の嶺の錦繍これも表つとふせま
物いくん或ハそこの別荘よあきとどちの音曲まぶくさる滑稽などを話
ありにあつりて柳よあがられど月花を友として天年を中までいる所あり
これを聞んとて「こよひの月を眺て」とうくバ集一と一葦に泛べてあ

けしからず流れゆくかどやねがひをむかへてこゝろみるとて「大ヤス川が桜か桜が
川か「コワイロむかしをおもふひとのふけゆく夜やちらさナリタヤア」はずかしうすぎてく
身につきてやうりかうのふりわけ花に映(えい)じくる月かげのさねをり子とこそ
やあと白うまぎれたるかのだ筆をとりて「よ桜のうらめしくや花のかげの
子もとのあとの「はなさく川よ秋月のかげふかくのよしのれをかたみて月をきく川
とひがりやなみのたちびる」うらがるへおもしろもあらじや
とおかくれあり今は世にかゝることおもひ出れバ蘇子の赤壁ハ秋の月花更
の墨水ハ春の花あり赤壁ハ酒にそくしきく蘭亭の曲水ハりしきりかゝり
しかや鳴呼此花月の優に美なるを愛れ玉ふなどやかしハこのまぎれなく
またしく折りて月に入るちまちるふ下のこゝろハ[illegible]
又絶景之手「ふじの山のたかねをもまさらちぎり[illegible]」
美(えい)しく似たらるなどち宗のまとこころそのこゆくもつくれべくあ
らまで
古今も世ニハ今まよくも花を惜むなどしよむところ今俗の意いう

ハ浅まさかりんぐるもあどらく風流(ふうりう)のこゝろもあさかけもとしぐ川とふ
ごとしとぞ
おもちられてくふにうつく松原らふちのるハ花の因果にたり
ゆく花のうきをまりて今の文字をといづくとそうまでくし川
まさく川春の世まれ名をところハおもやとのびくハ花さうりくの水
因ニ廻國雑記ニ「ひとちれてくのもり恭ぬ玉緒の
まうちのらふうくハきあらん」とうたへ奇説ぞ
うらおく[illegible]月見てあさくきとゞくる十一やんのくうらんせんふそ
待りくぐひなくさきつかり川ふてまりくりうとふん中男こゝふ花の
花のゝるうりく
あれど古今の中されバ「つくとぐもつくるまかるのさ花梵
此うそてハ[illegible]とこころんくり
されバ花の梵のゝるも古くいひつくへまりし
十ぢりのこちふ辰巳の寄が罪の[illegible]桜かくへきんの桜あるくの花
などさもあらうんとあるにもありなんこのさまふよきのるせりつけお
くくわしもあつされどかうくるゝハ後世まなづりつ文中ふそ

858
58

でもあるさや花をあげつるに春夢のあるしるしといふをなげ
みなあげくしうるさたれどさためのしつ

国立国会図書館　タイトル『花の十文附十論考』　請求記号　858-58
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『花の十文附十論考』 請求記号 858-58

ガラス使用